

設立50周年特集 (第2回) 観察会の変遷と課題

はじめに

文 木村 進(編集委員会)

協会設立前的大阪自然教室

協会設立前の観察会としては「大阪自然教室」が取組があげられる。その経緯については、「都市と自然」1976年12月号に当時の事務局長の黒沢孝生さんが「自然に学べ！子供たち一大阪自然教室の3年間」に書かれている。それによると、設立前の1973年8月に初めて開催され、主会場は石澄川(箕面市)で、他にも大阪各地での観察会や宿泊を伴う「美方自然教室」なども行われ、1974年からは会員制とし、約150人の子供たちが登録。学年ごとの班編成で、大学生を中心とした約20名のリーダーの指導で自然観察を体験した。

その後の観察会の変遷

協会設立後の観察会のグループ数や回数・参加人数を「都市と自然」のイベントニュースや活動日誌から、5年毎に調べてみた結果を図

に示した。設立当初は事務局や理事が中心となって、単発的な観察会を年間数回行っていたが、1980年代後半からは百樹会・大津池かんさつ会・箕面のシカをたずねる会など、月1回の定例観察会が始まった。その後、大阪城早朝探鳥会(後に大阪城バードウォッチモーニング)・新庄クラブ・千草会・グリーンレンジャーこども観察会なども続けられた。また、1月の事務所開きを兼ねた新春カモ観察会も恒例行事として定着し、コロナ禍で中止されるまで続いた。

1990年の自然観察インストラクター養成講座開講後は、修了生が中心になって各地で地域観察会グループの立ち上げが始まり、グループ数が20ほどに増加し、それ以降は少しずつ入れ替わりながらも現在に続いている。このころから、年間の観察会回数は急増して2001年がピークとなり、その後はやや減少傾

向にあり、2021年はコロナ禍の翌年でさらに低下したが、2024年は回復している。2001年以降の活動日誌には各観察会の参加人数が記されるようになったので、その数を合計すると図の棒グラフのようになり、2024年は年間約3,000人の参加者があり、1回の平均参加人数は約30人となる。

今回の特集について

今回の特集では、まず観察会の経緯と現状を各グループの代表者へのアンケートで集約した結果を紹介する。次に協会の観察会に対して古くからご指導をいただいた菅井啓之様に観察会に寄せる一文をお願いした。さらに、里山・海・都市公園の3つのタイプの観察会グループに、観察会の経緯について書いていただいた。これらの記事から、協会の観察会の変遷と課題を考えていただきたい。

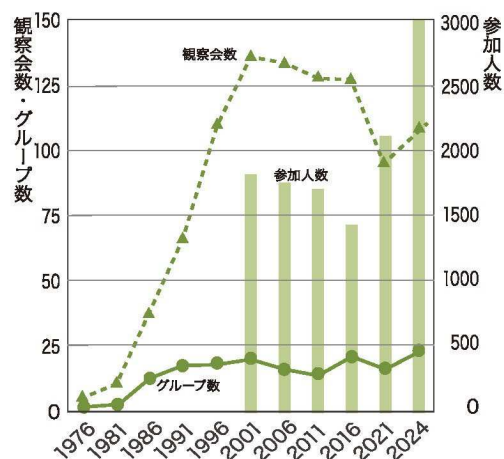


図 観察会グループ数・観察会数・参加人数の変化

表 観察会ミニ年表 主なものを記載。現状はP.9参照

1970年代	大阪自然教室の実施(箕面市石澄川ほか)	★:現在も継続中
1976	親子の自然観察会(石澄川ほか)	
1977	新春カモ観察会(淀川・中津、2020年以降中止)	
1985	百樹会(佐藤理事主宰)開始(2019年に337回目で修了)	
1988	★みんなでかんさつ隊開始(1989吹田自然観察会開始)	
1990	★自然観察インストラクター養成講座開講(これ以降講座修了生が、1992堺自然観察会・1993えぼしがた公園自然観察会・1994枚岡ネイチャークラブなど各地で観察会を立ち上げ)	
1993	★一斉観察会「どんぐりまつり」開始	
1996	★海のふしぎ観察会開始	
2011	★一斉観察会「セミ羽化ウォッチング」開始	
2020	コロナ禍で4～6月は観察会中止、その後対策を取り再開	

現在活動中の観察会の設立経緯と活動事例(グループへのアンケート結果より)

文 武内 亜矢(編集委員会)

50周年特集にあたって、現在活動中の観察会グループの皆さんにアンケートに回答いただいた。ここでは、各グループの設立経緯・参加者構成、やりがい・好事例について紹介する。

設立経緯と参加者構成

現在活動中のグループの設立経緯を、年表形式でまとめた(右表)。これを見ると、各グループが持つ特色とミッションがよく理解できる。また、参加者構成について下図にまとめた。家族参加の子どもの年代は、未就学児～小学校低学年が多い。年少の子の自然体験の場として活かされていることがわかる。保護者が観察会のスタッフになったり、インスト講座を受講したりする事例もあった。反面、中学生～大学生の参加者が少ないことを課題にあげるグループもあった。活動内容によって、中高年が多い回と子どもが多い回がわかるグループもある。

家族連れが多いが
大人の参加もある

大人・個人参加
が多い

家族連れが多い

図 観察会の参加者構成

表 現在活動中のグループの設立経緯

1988	みんなで かんさつ隊	城東区とその周辺地域の自然を知り、その自然を愛する人を組織化するとともに、観察会活動を通じて身近な自然を守る意識を醸成するために発足。
1989	吹田自然観察会	保全協会メンバーであった、市内中学教師の高島氏、金谷氏によって地域観察グループとして設立。
1992	堺自然観察会	身近なフィールドで地域の自然観察をしたいとスタート。愛称は「ゆっくっく」。平野弘二先生(近畿植物同好会会長)に講師を依頼し、鉢ヶ峰をフィールドに観察会を実施。
1993	えぼしがた公園 自然観察会	烏帽子形山は都市公園になる予定だったが、市民運動と保全協会の提言によって自然生態観察公園として整備された。インスト講座の実習地となり、修了生たちが公開観察会を開始した。
1994	枚岡ネイチャー クラブ	インスト講座4期修了生が「身近な自然を知るきっかけを提供し、その面白さ、厳しさ、優しさを感じて、地元の自然や里山の伝統、風習の大切さを伝えること」を目標とする自然観察会を結成。枚岡周辺地域を拠点に活動を開始。
1996	海のふしぎ 観察会	インスト講座4期生の尾鼻明子さんが仲間を募って結成。城ヶ崎海岸で専門家の協力を得て勉強会を重ね、96年10月に第1回を実施。二色浜、男里川河口干潟、海遊館等フィールドを広げている。
1996	服部緑地自然を 楽しむ会	「そよごの会服部緑地班」としてスタートし、「服部緑地自然を楽しむ会」に改称。
1998	枚方しぜん ハイキング	1998年、枚方市より委託された子供向けキャンプ「夏休み穂谷しぜん探検隊」の実施をきっかけに、そのスタッフが中心となり、ハイキングをしながら季節ごとの自然の移り変わりを観察する趣旨で観察会をスタート。
2009	茨木・高槻自然 に親しむ会	インスト講座と市民大学の修了生により、身近な自然に親しんでもらうことを目標に開始した。
2010	まち中公園 自然観察隊	街中にある公園で自然や生き物の魅力に気づく、視点を変えることでいつもの風景が新しく感じられる、そんな発見の手伝いができる身近な観察会を開きたいという思いからスタート。
2011	堺浜自然観察会	元事務局長の本多さんから、堺2区の生物共生型護岸の観察会をしないかと誘われたことから。
2013	チリモン ?	現代表の桑原さんは2017年から参加。大阪府下全市町村に「チリモン探し」を届けることを目標に、2017年7月に新プログラムを実施。
2015	大阪湾ウミウシ 観察会	個体数が少なく観察が困難なウミウシ。2013年から大阪湾の生息状況調査を進め、確実に観察できる状況となったため、有志に声をかけて観察会を開始した。
2017	カレーP(※)	保全協会40周年のイベントをきっかけに開始した。
2018	長松海岸 自然観察会	磯観察の参加希望者が多く、海の観察会だけでは受け入れきれない状況が続いていた。参加者を受け入れる体制を目指して設立。
2018	くまむしぐみ	グローイングアップワイルド(3～7歳対象)の講習会を受講したメンバーで、学んだものを提供する場としてスタート。
2019	team虹鯉	G20大阪サミットで海洋プラスチックごみ削減を目指す「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」が採択されたことをきっかけに、大阪湾ウミウシ観察会のメンバーから有志が集まってグループを結成。
2019	むしとりぐみ (虫鳥組)	くまむしぐみをきっかけに自然と親しみ始めた人々へ、もう一歩深く入った内容を届けるため、プロジェクトワイルド資格取得講座の修了生で結成。
2019	砂浜観察会	2015年に微小貝プロジェクトチームとして発足。活発に活動していたが、講師とのトラブル等で活動を断念。2019年に砂浜観察会として再出発した。
2024	淀川水系 自然観察会	淀川自然観察会の終了後、代表だった中野氏からレクチャーを受けて新たに発足。

・自然観察インストラクター養成講座は「インスト講座」、自然環境市民大学は「市民大学」と略記

※「カレーライスを本当に手作りするプロジェクト」をカレーPと略記

活動のやりがい、好事例

各グループの回答内容を、「参加者・スタッフの関係構築」、「参加者確保のための仕組み」、「調査活動」、「活動内容・プログラムの工夫」の4つに分類して紹介する。

【参加者・スタッフの関係構築】

◆子どもたちが喜ぶ姿を見るとやりがいを感じる(みんなでかんざつ隊)
◆今年のセミの羽化観察会は133人と、昨年の100人を大幅に超えた。リピーターが「楽しみにしている」と声をかけてくれる(吹田)◆グループでの活動を通じ、子ども同士が協力する過程で友達になる。子ども自ら採取方法を工夫する・場所を開拓するなど夢中になっている。幼少期から参加して、高校の生物部で活躍した子もいる。スタッフとのコミュニケーションが楽しみだという声がある(海のふしぎ)

【参加者確保のための仕組み】

◆年間パスポートを使って参加する仕組み。スタッフと参加者の関係が強くなり、翌年度にスタッフ参加する人が増えた。LINEグループに写真投稿することで、参加できなかった人にも活動内容が伝わり、継続参加率が高まる(カレーP)◆観察会にペットボトル飲料を持参しなかったら参加費を割引する「Noペ割」の仕組みを整え、海系の多くの観察会で導入(team虹鰓)◆ポイントカードを作成、5回参加で6回目は無料になるとしたところリピーターが増加。学校に配布する情報誌に観察会開催情報を掲載しても

らう等、行政と地域との関係構築を行った(えぼしがた)◆運営面では、インスト生のスタッフ参画が大きな力である(淀川水系)◆同じフィールドで継続して実施し、季節変化を理解できた。地引網やチリモンなどの人気プログラムを、ジュニア会員の保護者、インスト受講生などの応援スタッフの力を借りて実施した(長松海岸)◆同じ場所・同じ時期に継続して開催することで、リピーターが増えた。地域の方々にも活動が定着し、継続的な開催が信頼や親しみにつながっている(マチコ)

【調査活動】 ◆開発予定地、棚田の上段から下段まで植生の違い、ため池の土手の半自然草地などの「植生調査」を実施してきた。隠れ田だったと思われる谷底の植生の変遷が判明するなど、里山の自然の素晴らしさ・面白さを知ることができた(堺)◆大阪湾生き物一斉調査に参加し、新設の人工干潟における生き物の変遷を記録した。最初に生物種は増加するが、やがて伸び悩み、減少する。壊してしまった自然は簡単に取り戻せないことを実感した(堺浜)◆砂浜観察サポート図鑑を開発し、日本全国の砂浜を調査、全国対象のWEB図鑑を運営する体制を構築した。大阪湾やその近隣の砂浜で、貝がら拾い、標本箱づくりなどの多様な観察会プログラムを開発(砂浜)◆100回を超える観察会を継続。和歌山市加太海岸におけるウミウシ類の生息状況の詳細な調査を実施、大阪市立自然史博物館の雑誌に調査結果を投稿した。

J-OBISに登録し、市民参加型の調査としても成果を上げた。ミュージアムサポートの助成によって、ウミウシ観察会を日本全国に展開する活動に発展した(大阪湾ウミウシ)

【活動内容・プログラムの工夫】

◆同じプログラムを午前・午後で実施すると、午前の方が参加者は多い。大阪府全体では北部のほうが人の集まりがよいこと、チラシの集客力には限界があることがわかった。コロナ禍にはオンラインでプログラムを提供(チリモン)◆クモをテーマにした回は、参加者がいるか不安だったが申込があった。とりあえずやってみることが大切(むしとりぐみ)◆大人と子どもの参加費を同額に設定することで、大人も参加者であると自覚してアクティビティに取り組んでくれる。複数のアクティビティを組み合わせ、飽きることなく、どの参加者にも、楽しめる部分を作り出している。学んだことを思い出すきっかけとしての成果物(工作)も参加者を惹きつける要素(くまむしぐみ)◆生駒山の植生状況の観察を通じ、自然環境に対する愛おしさや慈しみの思いを共有・醸成した。山地保全活動は竹の伐採からヤマザクラ植樹へと展開し、厳しい作業だが、自ら手入れた地区や苗木には強い愛着が生じている。草木染などを手作りするすることで、参加への満足感が高まる(枚岡ネイチャー)◆穂谷の草本、樹木、昆虫、野鳥、獣とあらゆる自然との出会い・ふれあい、季節の移ろいを楽しめること。自然が多く、自然の深さを体験できる

(枚方自然ハイキング)◆ダンゴムシの迷路遊びや綱渡りなど、遊びを通じてダンゴムシの習性に興味を持ってもらった(服部緑地)◆セミ羽化、ホタル観察は、家族参加のため子どもが喜んでくれた(茨木・高槻)

終わりに

アンケート結果から、「自然観察」という核に付随して、調査活動、

地域との関わり、社会貢献など幅広い意義を持っていることがわかった。特に、子どもの成長の場となっていることは、次世代に豊かな自然をつなぐという点で大きな役割を果たすと信じている。アンケートでは、行政等との連携や現在の課題についても伺っていた。行政やほかのグループと連携して多様な活動を行うグループがあり、また多くのグ

ループが課題としてスタッフ不足や高齢化をあげていた。今回は紙面の関係で掲載できなかったが、これらの項目も保全協会の観察会の今後のあり方を考えるためには重要であり、また、別の機会に記事として取り上げたい。最後に、観察会の運営に携わる皆さまに敬意と感謝の意を表し、今後の発展を願ってこの文章を締めくくりたい。

自然観察会の帰趣

—健全な自然観の構築により、自己の信念で行動できる人を育てるために—

文・写真 菅井 啓之(元 京都光華女子大学教授)

都市公園で自然観察会を始めたのが昭和60年(1985年)、以来毎月一回行って現在通算477回、また森林観察を主とする緑懇会は平成6年(1994年)から今日までに374回行ってきました。以下にその経験から自然観察会の理想的なあり方を私なりに述べてみます。

1. 物覚えの段階から

さらに一步を深める自然観察会へ

帰趣とは、「物事の落ち着くところ、帰着点」のことをいいます。自然観察会は実に多種多様な活動であり、観察対象によっても、観察会の目的によっても千差万別で多岐にわたるものです。多くの自然観察会の主な活動内容は、生物名やその特徴・生態系の知見の解説であり、多くの参加者も自然観察会では生物について学び、より多くの知識を

知り覚えることだと認識しがちです。もちろんそれが自然界をより深く理解していくための入門でありステップになることには違いありません。確かに自然を知することは大切ですが、そこで停滞してしまつては本当に深い自然理解を伴った、健全な自然とのかかわり方のできる人にはなれません。そもそも「観察」とは「直観」「洞察」することであつて「見て知る」ことではありません。直観も洞察も心の働きであり、目に見えない自然の働きを見抜くことです。

2. 健全な自然観に基づく健全な

生き方ができる人をこそ育てたい

何歳になつても自然をより深く学び、自己の人生を豊かにし、世の中をより良いものへと深化させていく必要があります。そのためには、自然の学びが知的理解に留まること

なく、生きて働くもの、日々の生活を活性化するものにしていく必要があります。自然観察会の進め方は、当然そこを狙って、その人の人生をより深化させるものであることが望まれます。理想論のようですが、世の中が真に良くなるには、一人ひとりの価値観や美意識、自然観が深化し、より健全になることが必要なのです。明確な理想をもってそれに向かつて日々努力することこそが自然観察会を深化させる原動力となるものです。しかし現実には知的理解で留まりそこで満足してしまいがちです。そして自然が分かったという錯覚に陥るのです。美意識の涵養や自然観の深まりなどは一生の課題であり、無限の深さをもっています。もうこれで十分という到達点はありません。日々磨きをかけ、より一層深めていきたいものです。

3. 「健全な自然観の構築」こそが 自然観察会の究極の目的

大切なのは「自然をどう見るのか、どう考えるのか、その上で自分はどうか生きるのか」ということです。あくまでも自分で考え思索して、自分なりの見方を深めていくことが大切です。自分で考えてみるという活動は、自然観察会ではなかなか見受けられない状況です。ほんの一瞬考えてみる時間をとっても、しばらくすると「答えは何ですか?」という反応が返ってきます。このように知ることが感じることや考えること、行動することよりもはるかに優先されているのが現状です。自分自身で感じ、自分で考えてみるという経験の積み上げが、自然観を深めるとともに、自己の行動を深めていきます。

知ること、感じること、考えること、行動すること、これらがバランスよく働き合って一人ひとりがより良く暮らし行動ができるようになることが、自然観察会の本来の意義であり行きつき落ち着くべき所つまり「帰趣」であると考えます。「知る・感じる・考える・行動する・生きる」という活動がバラバラではなく、渾

然一体となった学びを実現したいものです。そのためには、自然観察会をリードする人たちの自然観察活動への認識がより深まり、自然観察会での学びが日々の生活に生きて働くように深化させていく必要があります。「自然観」の深まりが「行動」や「生き方」を深めていきます。

見方の浅い人は行動も浅く、見方を深めていくことで真に的を得た自然への行動が実践できます。自然観が定まると、太陽系のように様々な星が多様な運動をしていても、常に太陽という中心に引っ張られていて、全体から見れば一糸乱れることのない活動をし、秩序整然として調和がとれているように行動が安定します。中心には「健全な自然観の構築」「観即行（観ることがそのまま行うこととなる）」「学即生（学ぶことがそのまま生きることにつながる）」という不動の信念が働いているからです。健全な自然観とはそもそも何を指しているのか。何ををもって「健全」とするのかについては、固定的にとらえるのではなく、常に探究し続け、深化し、進化させていかなければなら

ないものです。健全とはバランスの取れた調和的な中道を行くことをいいます。

目の前のすべての自然（物）は「自然界の真実に迫る窓」であり、葉っぱ一枚、小石一個、何を見てもその向こう側に自然の神秘・妙・不思議さを深く感じて、その窓を興味深く覗いて見ようという気持ちが起こるものです。自然に謙虚に学ぶ姿勢が自然観を深めます。

自然を学ぶことは自然を生きることであり、「観＝学＝行＝生」の融合が真の学びです。

4. 先人の言葉に

自然観察のコツを学ぶ

- ・「松のことは松に習え 竹のことは竹に習え」（松尾芭蕉）
- ・「何もない 見ればある」（河井寛次郎）
- ・「バラの木にバラの花咲く なにごとの不思議なけれど」（北原白秋）
- ・「今見よ いつ見るも」（柳宗悦）
- ・「study nature not books（本からではなく、自然に学べ）」（アガシー）



樹木の根を見ることで、普段意識しない世界が裏側にあることに改めて気付く。私たちは常に自然の半面しか見ていないことへの自覚。



下のツノガイは構造が単純、上のホネガイは複雑、同じ海で生きる生命の多様性の不思議、この窓の奥には絶妙な世界が広がっている。

観察会の変遷と課題(里山・海・都市公園)

① 里山：茨木・高槻自然に親しむ会

文・写真 福田 雄一(事務局)

「茨木・高槻自然に親しむ会」(以下「いばたか」)は、2009 年協会の主催行事のインストラクター養成講座と、自然環境市民大学の修了生によって立ち上げられました。その時の思いは、「せっかく講座を受けたのに、このまま終わってしまったら、研修を生かす場が見つからない」「研修で仲良くなれたし、これからも付き合いたい仲間なのでこのまま解散するのはもったいない」と意欲的だったと聞いています。

観察会のねらいとフィールド

○ねらい

- ・茨木市と高槻市を中心に北摂の自然をより身近に感じてもらいたい。
- ・専門知識より、広く、浅く自然環境の出会いや発見を大切にしたい。(具体的には、植物・野鳥・両生類・昆虫が主なジャンル)

○フィールド

上記のジャンルに沿って、両市から選定した。

茨木市

- ・元茨木川緑地公園「セミ羽化」
- ・泉原地区「里山観察」
- ・耳原公園「冬鳥探鳥」
- ・安威川ダム地「ダム工事による環境への影響」

高槻市

- ・川久保溪谷「水源林」
- ・鶴殿「ツバメのねぐら入り」
- ・成合地区「ホタル」
- ・原地区「里山一斉調査、地元の伝統祭り見学」
- ・淀川河川敷公園「野鳥と春の野草」

観察会の変遷と課題

- ・当初は 10 ～ 11 回の行事プラス下見で 20 回以上の日程があり、かなり忙しかった。
- ・安威川ダム工事現場は大型公共工事と環境保全について考える機会となった。
- ・新名神高速道路により、原地区での里山調査のコース変更をやむなく行い、生きものの一斉調査は中止した。
- ・2018 年 6 月大阪府北部地震、

同年9月台風 21 号により、北摂の山や里山は大きな被害を受け、自然環境が激変した。特に川久保溪谷は倒木被害が甚大で、以前のような観察会はできなくなった。

- ・コロナ禍で休止が続ぎ、活動が実施しにくくなった。

他機関との連携

- ・茨木市の環境政策課からの依頼を受け、2020 年～ 2024 年の 5 年間、茨木市の環境資源調査の補完調査に協力した(コロナ禍で中止含む)
- ・茨木市が 2006 ～ 2007 年に行った環境資源調査を補完するもので、調査と同時に生きもの調査員養成講座も兼ねていた。

今後の抱負

昨年2人のインストラクター修了生と新メンバーが加わり、活動が活性化しました。今後も長く観察会を続けていけるように願っています。



セミの紙芝居を見る子どもたち



アケビコノハの幼虫



ユキモチソウ

② 海：海のふしぎ観察会

大阪湾周辺の海辺で、いろいろな海の生き物を観察してふれあい、海の生き物のおもしろさ、すばらしさ、尊さを伝え、海を大切にする気持ちを育む観察会です。1996年10月19日和歌山県加太城ヶ崎で第1回目の観察会を実施しました。今年で30周年を迎えます。

はじまり

1995年にスタートした「海遊館自然観察会」（海遊館と共催）のスタッフが、自然の観察会をしたいと1996年10月に海の観察会が始まりました。当時のリーダーは中野勝弥さんと故尾鼻明子さんです。最初の数年は春と秋に城ヶ崎で磯観察会を実施し、スタッフ30名、参加者定員100名とかなり大規模なものでした。当時の主なスタッフはインスト講座修了生やグリーンレンジャーで、クイズを作成したり、磯での注意事項を寸劇で行ったり、観察会終了後は、観察

会の報告をまとめた「umi通信」を作成して参加者に郵送していました。第1回より講師をして下さっている池辺先生には、この会は寸劇が良いんや!とおっしゃって頂いていた。

フィールドの広がり

2000年からは、スタッフから他のフィールドも行ってみたいという声上がり、新しいフィールドやプログラムに挑戦するようになりました。故松下宏幸さんが近木川河口干潟に行ってみたという声があったことが最初だったように思います。そこから「近木川のカニつり」「海藻おしば」「長松海岸の磯観察」「貝殻拾いと万華鏡づくり」「男里川河口干潟観察」「ウミホタル観察会」「シュノーケル体験」「豊国崎・東川河口の生き物調査」「尾崎海岸のアマモ場調査」「成ヶ島バスツアー」「淡島神社での磯観察」等を実施してきました。2012年からは、大阪湾生き物一

文・写真 池村 直美(スタッフ)

斉調査に参加しています。また、磯やアマモ場の観察で使える小冊子を作成し、観察会で配布しています。

現在の活動

主なスタッフは10名程で状況により応援スタッフに協力してもらいながら、磯や干潟、アマモ場等フィールドを変えて年に5回～7回観察会を実施しています。

課題

毎回、たくさんの参加申し込みを頂きますが、スタッフ不足によりお断りしなければならない状況です。一緒に活動できるスタッフが増えることを切に願います。

おわりに

私自身、観察会に参加するたびに生き物や自然の素晴らしさを改めて感じています。参加者の皆さんにも、観察会で出会った生き物や現地での体験をご家庭で家族と語り合えるような場にしていきたいと思っています。これからも、そんな観察会を続けていきたいです。



シュノーケル体験会 (2024年)



青白く光るウミホタルの観察 (2023年)



長松海岸での観察会の様子 (2013年)



注意事項の寸劇(2000年)



配布資料の表紙

③ 都市公園：みんなでかんさつ隊

文 小嶋 裕(代表)

観察会発足のきっかけ

1993年に現スタッフの小川さんや清水さんたち区民センターで活動していた方々の有志が城東区民センターの主催する「城東おもしろ探検隊」を始めたのが、みんなでかんさつ隊の源流である。「城東おもしろ探検隊」は、春は「わがまちウォッチング」を、秋は「どんぐり祭り」をと、年2回のペースで活動した。

この活動をしていた有志の一部が1997年4月1日に立ち上げたのが「城東自然観察(仮称)準備会」である。準備会は観察会を一般公開せず、1年後の1998年4月1日に「みんなでかんさつ隊」が発足した。準備会のメンバーの子どもさん(小1)が観察会の命名者となり、子どもたちにも分かるように「観察」ではなく「かんさつ」と平仮名表記にした。



岡田三朗さんデザインの旗

みんなでかんさつ隊の活動

第1回の観察会は「野崎の山にどんぐりを植えにいきませんか？」であった。この時のスタッフは小川さん、清水さん、岡田三朗さん、私その他2名の6名であった。初年度は、セミ羽化、リースづくり、水鳥の観察会と4回の観察会を実施した。翌1999年度以降は、タンポポとバッタの観察会などを加え、2019年度までは概ね年間6～9回の観察会を実施した。スタッフは小川さんがその才能を生かしリクルートされ、観察会実施回数の増加に伴い次第に増加した。現在のスタッフの岡和田さんは2007年から、湯浅さんは2011年から参加されている。

2025年12月までの活動実績は観察会実施回数191回、参加スタッフ数1,337名、参加者数3,951名となっている。下見や参加者がおらず実施できなかった観察会に参加されたスタッフを入れると、参加スタッフの数は延べ2,000名を超

えていると思う。多くの方々に支えられたおかげで、28年にわたる観察会が継続できたものと感謝している。

今後の課題と期待

まず、第一には、スタッフの高齢化である。平均年齢は70歳代半ばになっている。

次に、プログラムの新規開発ができず、マンネリ化が進んでいることである。

2020・2021年度のコロナ禍は例外として、2022年度以降に参加者が来なかった観察会が増加しており、観察会実施回数は年間5回程度と減少傾向にある。

しかし、最近、嬉しいことがあった。インスト受講生の中からスタッフとして参加したいという方が現れた。スタッフの若返りが行われ、新しい発想で、今の親の興味を引き、子どもたちが喜ぶ観察会ができることを期待している。



観察会の様子 セミ羽化の観察会



観察会の様子 紅葉の秘密の説明